

タイ北部における村落の空間構成

～T 村の村落図による可視化をもとに～



Keywords:

タイ北部 村落図 空間構成
可視化 可視化

AK11025 大山 凌

1. はじめに

1.1 研究背景

日本の都市部で生活するわたしは様々な住居が集合した空間の中で生きている。それに対して、北タイには独自の文化をもつ人々が暮らしている。そして、村落空間に寺院などの宗教的建築物を配置したり、様々に意味づけられた空間を配置することで日々の生活のための空間を作り上げている。北タイの村落空間をみるとすべての住居が同じカタチをし、まとまりのあるように感じた。その姿は何かの決まり事によって秩序づけられたように見え、村落内での共通意識を感じることもできる。村落を形成するにあたって社会的な取り決めが存在し、人々の行動規範となり、いつしか秩序を持った集合体として村落のカタチとなったのではないだろうか。

1.2 研究目的

本研究はこのような問題意識から、北タイの一農村の村落空間の実態を多様な側面から明らかにすることを目的とする。村落空間の構成を把握するにあたって、宗教的建築物や学校・火葬場等の公共空間が村落内における生活にどのような結びつきがあるのかに着目する。また、村落図を作成・利用し、重要な情報や空間を記すことで村落の空間構成を可視化する。さらに、村落内の人々が生活を営む上で村落空間と外部との関係を明らかにしていく。

1.3 研究方法

本研究では宗教と密接に関わる暮らしをする人々の T 村を対象に 2014 年 09 月 22 日～2014 年 10 月 01 日にフィールドワークを行った。

2. 調査地概要

2.1 T 村の概要

チェンマイは首都バンコクから北方約 720km の位置にあり、タイでは第二の都市である。調査をした T 村はチェンマイ市街から南へ約 30km の位置にあり、ピン川の支流であるカーン川沿いにある。ここではタイ・クーンと呼ばれる人々が生活している。タイ・クーンは、ミャンマーのシャン州の州都セントウンにいたが、100 年以上前に北部タイまで越境してきた民族であり、北タイという

地で独自の文化を持った村落を形成している。T 村の人口は 661 人で住居数は 200 軒ある。

村落内の北西には寺院があり、廃校となった小学校が近くにある。村の中心には集会場があり、それを囲うように多くの住居が存在する。村の中心に存在する集会場内には村落の安寧と繁栄をつかさどる村落守護精霊のスペースがある。図 3 で示している文化品の展示をする施設の管理は、本調査でお世話になった N 氏が行っている。南西には火葬場があり、村の人々の火葬はここで行う。居住空間が密集している地域以外には畑や果樹園が広がっている。



図1 T 村の位置

2.2 T 村の宗教

T 村の宗教は上座部仏教と精霊信仰・祖先崇拜である。住居にはヒンプラ、チャオティーと呼ばれる祭壇が存在する。ヒンプラとは仏教の祭壇であり、これに対してチャオティーは土地の神様であるため、アニミズムの祭壇といえる。この村の多くではチャオティー等の精霊信仰の祭壇に祈願を行うことのほかに、仏教に関する年間儀礼も行われている。その他、かつては結婚や病気の治療

に関する儀礼が数多くあるが、それらを知っている者は年々減少している。

3. フィールドワーク

T 村で 10 軒のインタビューおよび実測調査を行った。

3.1 インタビューシート

インタビューシートでは家族構成・一日の行動・居住の形態・儀礼・各世帯の祭壇の位置・宗教的建築物や村の外部との関係等について聞き取り調査を行った。

3.2 実測調査

実測調査では以下を行った。

- ・ 調査対象世帯の平面図（1/50）、外構図（1/100）、8 軒を対象とした断面図（1/50）
- ・ 各世帯の祭壇詳細図
- ・ 村落図

3.3 写真

各世帯の住居、外構、祭壇等の詳細写真
村落内の寺院や公共建築物の写真
その他重要と考えられる写真

4. 分析の視点

4.1 寺院

村の北西に位置する寺院には高齢者が多く訪れており、寄進や祈願以外の理由として高齢者同士での会話などを目的としている。憩いの場となっている寺院は信仰の対象としての役割のほか、少子高齢化が進む村にとって人々、とくに高齢者のコミュニケーションが行われている空間となっている。

4.2 祭壇

村の中心の集会所に位置するスアバーンという祭壇は村人の文化的活動の拠点となっている。また、別の場所には村を作った人達のひとりとされる先祖を祀る祭壇があり、スアバーンと同じタイ正月後に儀礼を行う。

4.3 文化的活動

T 村では村の儀礼や歴史を知る者がたくさんいる。また、村の景観を保持することに強い意欲を持っている。さらに、村で以前使用していた農具やモノを集めて展示をしている住人がいたり、村の伝統的文化を保存する動きが活発である。また、村人への聞き取り調査から、廃校になった小学校を高齢者の憩いの場とする計画や村の文化を紹介する施設にする計画などがある。そのほかにも T 村では村の文化を紹介するためのパンフレットがあり、宗教空間の説明や衣食住を含めた文化全体の紹介等が記されている。以下、5,6 ではこうした寺院・祭壇・文化的活動に焦点を絞り、より詳しく考察していく。

5. 宗教的建築物からみた村落空間

5.1 寺院

T 村の北西にはドンチャイ寺という寺院が存在する。上座部仏教を信仰する村人にとって、そこは寄進や信仰を目的とした場であり、日々の生活に関わる空間である。また、公教育が普及する以前は教育の場としての機能を備えていた。現在、少子化によって廃校となってしまった小学校が寺院の近くに建っている。それは公教育が普及する以前は寺院で教育が行われていて、その後小学校の建設にあたって村落内での（教育の場としての）寺院と同様の位置関係となる場所に計画されたことを意味している。

上座部仏教を信仰する村人にとって、寄進を行うために寺院を訪れる行為は慣習となっている。T 村では仏教に関する年間儀礼として、1 月のターン・カオ・マイは自分の家におさめる前に寺院へ新米を寄進する日、7 月のカオパンサーは僧が仏教の修行に専念するために寺院にこもる日、9 月のサラガパットは死者の弔い、自分の来世のための寄進の日、10 月のオークパンサーは僧が寺院での仏教の修行を終える日、などがある。カオパンサーはパンサー（雨季）に出家者が寺院にこもり、修行につとめたことに由来する。3 ヶ月後のオークパンサーまでの期間中は、人々はいつもより持戒に思いを馳せる。このように寺院を訪れるという共通の意識を村人が持つことで自ずとつながりを持った社会となり、信仰へのさらなる強

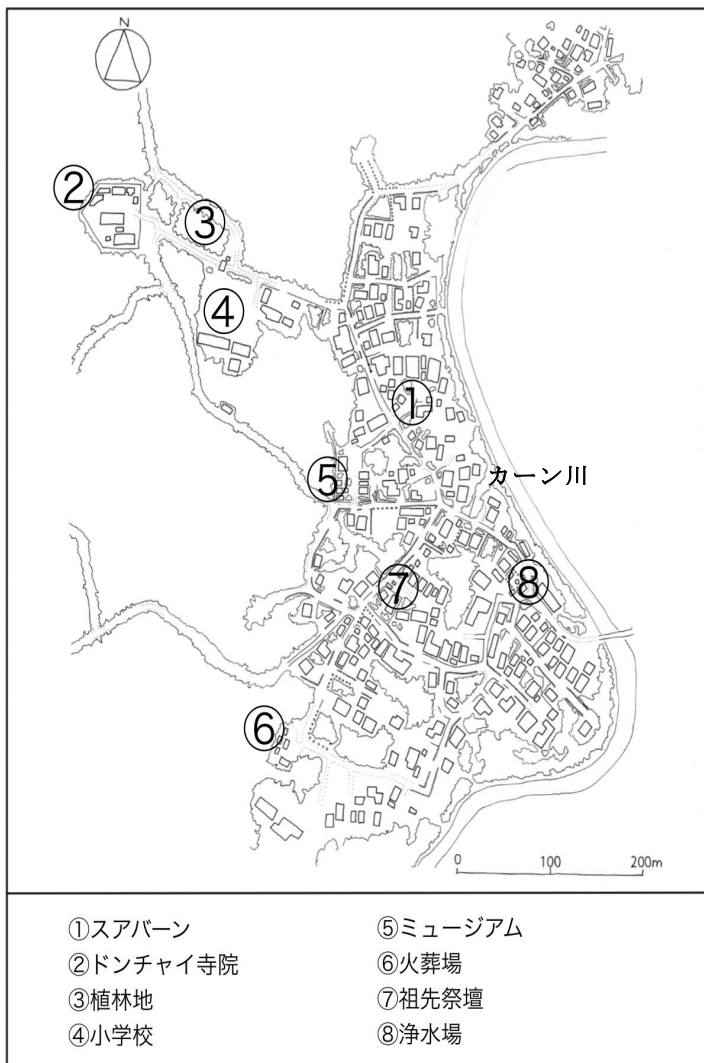


図2 T 村概要図

い意識を生み出している。寺院で行われる行事に参加することは村の活動に参加することにつながり、村落生活にとって不可欠な行為となる。また、村人たちによって寺院を保持するというのは日々の生活に上座部仏教の影響が密に染み込んでいることを意味する。

5.2 祭壇

スアバーンは村の中心に位置する集会場に存在する村落守護精霊の祭壇である。祭壇内には村落守護霊のための枕と布団が敷かれており、お供え物が置かれている。村の自治会長である M 氏によると、先祖が森や荒野を拓いて新しく村を作る際に、まずは土地の主である精霊への祭祀を行い、土地を開拓することへの許しを得る。そうすることで土地の主は新しく作られた村の守護精霊となる。その後、村落守護精霊に対して定期的な祭祀を行うことによって、守護精霊は村に安寧と繁栄をもたらしてくれると信じられている。4 月に行われるソン・バーンは村から悪霊を追い出す儀礼、6 月に行われるリェン・スアバーンは村落守護霊に対して供え物をする年間儀礼である。

祭壇は寺院と比べると規模が小さく、植林のような大きい活動がない。しかし、祖先崇拝や精霊信仰を表すものは住居内や村のあちこちに存在し密接に村人の生活に結びついている。住居内に存在するヒンプラやチャオティーの祭壇は寺院と比べた時に、より身近にある信仰の対象である。また、スアバーン等の村の祭壇も寺院と比べると村人の生活に近い位置に存在している。ヒンプラやチャオティーといった祭壇が生活に近い位置に存在し、日常的な祈願の対象となっていることは、村人にとっての精神的な支えとなっており、必要不可欠な存在である。

T 村では村の安寧と繁栄をもたらす守護精霊は村落中心部にあり、それを囲うように居住空間が広がり日常的な祈願の対象である祭壇を設ける、そして寄進や行事の目的で訪れる上座部仏教寺院は村の外れに位置し、上座部仏教・祖先崇拝・精霊信仰がうまく共存し、村落空間を構成しているといえる。

・ 仏教儀礼									
①	②		⑤		⑥	⑦	⑧		
1	4/13	4/16	6	7	9	10	11	12	
③			④		⑨			(月日)	
・ 精霊儀礼									
①ターン・カオ・マイ			④リェン・スアバーン			⑦オークパンサー			
②ソクラーン			⑤カオ・パンサー			⑧カティン			
③ソンバーン			⑥サラ・ガバット			⑨ロイ・クラトーン			

図 3 T 村年間儀礼

6. 文化的活動からみた村落空間

T 村では村の儀礼や歴史を知る者がたくさんおり、様々な自治的委員会がある。今回の調査で文化的活動についての案内役を務めてくれた N 氏は T 村の儀礼や歴史等の知識が豊富である。

N 氏によると T 村の村人は村落内の景観を保持することに強い意欲を持っている。村落内のさまざまな住居が村の文化的価値を高めるために維持され現在も使用されている。今回の実測調査で対象となった住居はそうした背景から選ばれており、タイ国内で住居形式が時代の流れとともに変化していく中でも T 村では彼らの伝統的住居形式を保持しようとする試みとなっている。このように、伝統的住居が村落内のいたるところで保持されていることで、村落内全体の景観が損なわれることなく保持されている。

その他の文化的活動として以前使用していた農具やモノを集めて展示をしている N 氏がいたり、村の伝統的なモノを保存する動きが活発である。N 氏が運営する文化品を展示するミュージアムでは T 村の歴史が濃縮され展示されている。ミュージアムは 2 棟で構成されており、平屋の棟では農業や漁労に関する伝統的道具が展示されている。2 階建ての棟では 1 階に村で使われていた生活用品等があり、2 階にタイ・クーンの民族カレンダーやコイン、工芸品等の民族的文化品が展示されている。ミュージアムを訪れることによって T 村のアイデンティティーを感じることができるよう計画されている。このように T 村のアイデンティティーを日々の生活のなかで感じることが村人にとって重要であり、ただ単に伝統的なモノを集めているのではなく、アイデンティティーを維持するという意味を持った空間として T 村の文化を保持している。

T 村では、T 村の文化を紹介するための 62 ページにわたるパンフレットが郡から支給された資金によって作成されていた。「T 村のタイ・クーンの文化」と題されたこのパンフレットでは宗教空間の説明や衣食住を含めた文化全体の紹介等が記されている。第 1 章では「村の歴史」について書かれており、タイ・クーンの起源や T 村の歴史、交通、職業、ドンチャイ寺の歴史の説明がある。第 2 章では「村の生活」について書かれており、衣食住、医療、文字、信仰と宗教行事の説明がある。第 3 章では「文化の継承」について書かれており、織物、漆器、タイ・クーン博物館の説明がある。第 4 章では「村の古老たち」について書かれており、タイ・クーンの文化継承者の説明がある。第 5 章では「村の文化復興・継承活動」が書かれており、活動の写真や文化イベント、T 村の村長の説明がある。



写真1 左：パンフレット表紙 右：ミュージアム内



図3 T村宗教概念図

7. 考察

村落とは単にある場所に人々が集まり居住しているのではなく、社会的・文化的に統合されており、共有財産を持つことや共有空間の利用によって、村人は村への帰属意識を生み出して生活している。T村はミャンマーからの移住を余儀なくされた民族が現在の地でタイ・クーンという民族的アイデンティティを背景とした社会（村落）として形成される。T村の事例は北タイにおける地域社会の生き残る姿のひとつのカタチではないだろうか。

村落の中心部には共有地として集会場があり、村落守護精霊の祭壇がある。それを中心として広がる各住居には日常的信仰の対象である祭壇がある。さらにその周りに上座部仏教寺院や火葬場がある。これにより日常的に重要である宗教空間が村落の中心に近く、行事として重要な宗教空間が中心から離れた位置にあることがわかる。また、T村の寺院は寄進や信仰の目的だけでなく社会変動とともに変化する、村人同士の憩いの場としての役割を持つ空間となっている。祭壇では村を守るスアバーンやその他守護霊の祭壇が人の生活に密接に関わり、日常的慣行の宗教空間として存在している。この宗教空間が生活の場に密接に関わっていることによって村人の共有空間としての役割を持ち、日常的に接することで帰属意識を生み出している。

文化的活動はタイ・クーンとしての民族的アイデンティティを確認するための行為となる。近年都市化が進むチェンマイでは村内外の道路網の整備、電気整備、用水路整備が進められている。生活の質は格段に向上しているといえる。その反面、人々の関係は希薄化し、消失してしまった儀礼が数多くある。そして、外部の世界へとのみ込まれ埋没してしまう恐れを抱えている。本来、ミャンマーにいたタイ・クーンの人々が北タイという地で埋没することなく開拓した村のひとつがこのT村である。開拓した先祖たちは生き残る術として、自分たちのアイデンティティとなる文化を大切に、独自の発展と保持をしてきた。T村の現在の村人は、先祖たちと同様にこの日々変化していく世界の中で埋没することなく民族的アイデンティティを確立する活動を行っている。この文化的活動によりT村の人々は帰属意識をさらに高めることができる。

8. おわりに

北タイに住む、ミャンマーにルーツを持つタイ・クーン。先祖が森を開拓し、村を形成していくなかで、T村の人々は仏教という外部と共通の宗教への実践と、独自の生活のなかで生まれ発展した精霊信仰への実践をうまく共存させてきた。それは宗教的側面から見たT村の姿であり、人々の生活の変化とともに経験と知識に根ざした宗教空間を作り出している。

参考文献

- 1) 2010「集落の組織過程における中心性について」
清水郁郎 平田智隆 古館美聡
- 2) 2011「村落の空間構成と中心性」平田智隆 古館美聡 國井昌紀
- 3) 2005「家屋とひとの民族誌」清水郁郎
- 4) 1998「集落の教え」原広司
- 5) 2012「フィールドに出かけよう！」日本建築学会 編